

# バス代440円阻んだ妹との最後

## 受給者を 生きる

上

2016年の秋ごろだったと思う。金沢市内で一人暮らしをする真田芳弘さん（現在75歳）の携帯電話が鳴った。

三重県に暮らす5歳下の妹だった。金沢駅前のホテルにいたという。「会いたい」。理由はよく分からないが、そう言われた。数カ月前に母親を失い、妹が連絡の取れる唯一の身寄りだった。小さい頃から仲が良かった。

「小学校の時に、おれが家から閉め出されたわけよ。門限守らなくて。そして妹が泣いてくれたさ。『兄ちゃんを家に入れてくたさあい』って。なんか気が合ったんだよなあ」



真田芳弘さん。生活保護制度は、施しのような印象を与える「保護」ではなく、権利であることを強調して「保障」と呼ぶべきだと考える＝金沢市内

代は、往復で440円もかかる……。

真田さんは、09年から生活保護を受給している。国民年金と合わせた月収は、10万円程度。家賃3万2千円のアパートに暮らし、食事は1日1〜2食に抑える。冬場はエアコンをほぼつけず、室内でもニット帽をかぶり、上着を2、3枚重ね着してやり過ごす。

そんな身に440円は惜しかった。「無理だよ」。また会えると思っていた。断った。

それが、最後の会話になった。1年後の秋ごろだったと思う。また、携帯電話が鳴った。今度は、妹の息子が「明日通夜」「明後日葬式」「来てほしい」。妹は子宮頸がんを患っていた。

「ウンだろって。愚考停止だよ。とにかく行かなきゃって」。三重県での葬儀

場へ、「全財産ひつつかん」で「向かった」。

金沢駅へはタクシーで。数十年前の鉄道は切符の買い方が分からず、駅員に行き先だけを伝えた。「とにかく早いのを」。お金はずしくなかった。

葬儀場に着いたが、飯も酒ものを通らなかつた。葬儀場に泊まり、色々と考えた。なんとなく、あの電話の意味が分かった気がした。「もう死ぬって話だったんだろな」「いや、まさか、死ぬとは思ってなかつたから。次会った時に話せばそれでいいと思ってたから」

「タクシーでもなんでも使って会いに行ったらよかつた。失敗したよ」

葬式の日。喪服のジャケットを持っていなかったのでも、義弟らに頼んでレンタルしてもらった。棺の中の妹の顔は、「きれいだったよ。うまく化粧してもらってさ」。

「ウンだろって。愚考停止だよ。とにかく行かなきゃって」。三重県での葬儀

妹は14年ごろ、真田さんが生活保護を受けていると知ってか、家を訪ねてきた

ことがある。

「タオルとか、上着とか、おんな山みたいにして持ってきてよお。『いいよお』って着たんだけど、置いてってさ。あん時は、なんでこんな悪趣味な服ばっかと思つたけど、今思うと生活保護のおれを心配してたんだな」

妹が亡くなって4年が経った。「まあ、人はみんな死ぬからさ」。でも、「おれより先って。ちよっと早すぎたんじゃねえかなあ」。寒くなるこの時期、寝る時も外出する時も羽織る上着がある。シンプルなデザインの色合いのジャケットだ。

「悪趣味だろ？ 妹がくれたやつなんだけど、まあ、暖かいから着てるのよ」

生活保護を受給する。その暮らしぶりは、憲法25条が保障する「健康で文化的な最低限度の生活」と言えるのか。国による生活保護基準額の引き下げの取り消しを求める訴訟に原告として参加する真田さん。その「受給の日々」を2回にわたって伝えます。

妹は14年ごろ、真田さんが生活保護を受けていると知ってか、家を訪ねてきた